

運命にあるように

イーシャ・サーデサイによる再話

春の始まりが近づいていました。ぼろぼろの兵士たちの一団が、京の都の郊外で休息を取っていました。彼らの小さな野営地を、今まさにほころび始めた桜の木々が縁取っていました。淡紅色の花——桜の花——が咲いているのが枝から垣間見え、つかの間の平穩の光景となっていました。

ある朝早く、この部隊の大將がそれらの桜の木の一つの下に座り、野営地を見ていました。彼の兵士たちはゆっくりと眠りから覚めつつありました。ある者は火を起こすために積まれた薪をつつき始めていました。他の幾人かはありあわせのもので食事を作っていました。

それは、長年にわたって日本の多くの地域にまたがって戦われた長い戦争でした。大將には、その戦争が兵士たちにもたらした打撃が分かっていました。兵士たちは一度たりとも苦勞を口にしませんでしたが、彼は兵士たちのことをよく分かっていました。兵士たちの顔がわずかに青白くなったこと、彼らの歩みが次第に遅く、重くなったこと、戦場を離れるとすぐに彼らの肩がすぼまり落ちてしまうこと。かつて、男たちは堂々と顔を上げて歩いていたものでした。戦の勝利を誇り、次も必ず遂行するであろう勇敢な行為を誇っていました。

大將がそこに座り、士気を高めるために何ができるだろうかと熟考していると、兵士の一人が彼の所へ走ってきました。

「大將！」 その男は息を整えようと手を膝の上に置きながら言いました。「御所からの知らせです」と、彼は長く細い包みを差し出しました。

大将は兵士の手から包みを受け取り、中の紙を広げました。それは、伝言の内容とはそぐわない格調高い筆跡の書で整然と隙間なく覆われていました。大将は読み終わると黙り込み、地平線の向こうに目をやりました。太陽が昇り切ろうとしていて、薄もやのようなオレンジ色の光が桜の木々を照らし、その暖かさで辺りが色づきました。

「大将？」 兵士がためらいがちに言いました。「どうしましたか？」

大将は少しの間黙っていました。ひとひらの桜の花が上の枝から舞い落ち、彼の膝の上に落ちました。彼はそれを拾い上げ、その紙のように薄い花びらをじっと見詰めました。花びらはほとんど白色でしたが、そのどこかに赤色の花脈が間違いなく流れているはずでした。

大将は兵士の方を向きました。「我々は間もなく戦いに戻らなければならない」と言いました。「敵は北から攻めてくる。大きな軍勢だ」

「どのくらいですか？」 兵士は尋ねました。

「少なくとも歩兵は我々の3倍、騎兵は2倍の数だ」

「援軍は呼べますか？」

「ああ、しかし間に合わないだろう」

「ではどうしましょうか？」

「戦うのだ」。大将はただそう言いました。そう言うと立ち上がって、手紙を衣の中にしまい込み、野営地の外に向かう道に沿って歩き始めました。

兵士の質問が大将の心の中にいつまでも残っていました。彼らはどうしたらいいのでしょうか。どんなに兵士たちが勇敢に戦っても、敵をかわすことができなければ、都は占領されてしまうでしょう。

大将はしばらくの間歩き続け、やがて角を曲がると、目の前に真っ赤な鳥居が現れました。彼は神社の入り口にいたのです。鳥居の両脇にあったのは石でできた2匹のこま犬で、1匹は口を開け、もう1匹は口を閉じていました。狛犬たちは堂々とした石像で、さらになぜか、彼を中に招き寄せているように見えました。

大将は鳥居をくぐり神社の中に入って行きました。拝殿に着くと、頭を垂れ、床に頭を付け、それからしばらくの間、端座していました。神社の静寂が肌に染み込み、彼の心の空間に沈殿していくと、彼は目を閉じました。自然に祈りの言葉が内側から生じました。この任務を遂行するための強さと知恵を得られるように、今もこれからも永遠に、都が確実に守られるようにと祈りました。兵士たちが再び家族に会えるようにと祈りました。

祈りのさなか、それが聞こえました。ある音、それは最初はかすかでしたが、次第に大きくなりました。その音は彼の後ろのどこかからやって来ていました。何か金属のような音でした。

目を開けると、すぐに音の元を見つけました。それはシュルシュルと小気味よく床を転がる銅貨でした。ちょうど彼が座っている所まで来た時、速度を落とし、その面を向けて回り、上下にぐらぐらして——カタン——ついに床に落ちました。

大将は辺りを見回しました。神社には誰もいません。彼は銅貨を拾い上げ、手のひらの上でひっくり返しました。つかの間、一心にそれを見詰めていました。ゆっくりと、彼の顔中に笑顔が広がりました。

その日の朝遅く、大将が野営地に戻ってから、彼は兵士たちを周りに集め、戦いが今にも起こることを告げました。彼らはその知らせを冷静に受け止めましたが、大将には彼らが恐れているのが分かりました。彼らの目は大きく見開かれ、口は硬く一文字に結ばれていました。

「おまえたちが何を考えているかは分かっている」と、大将は言いました。「しかし、運命はいつも予想されるようになるとは限らない。ここにあるこの銅貨が見えるか？」

彼は神社で見つけた銅貨を高く持ち上げました。

「この銅貨は私が近くの神社で祈っている時に、私の所に落ちて来たのだ。これはお告げだと信じている」

「お告げですか？」と、彼らの一人が言いました。「どのように、大将？」

「そうだな、かつて我々の祖先の時代に、指揮官がしていたことを知っているか？」

兵士たちはお互いに顔を見合わせ、ぽかんとした表情をしていました。

「いいえ、大将」と、ついに彼らは言いました。「知りません」

「では、説明しよう」と、大将は言いました。「大きな戦いの前には常に、指揮官は、ちょうど今日おまえたちが集まっているように、兵士たちを周りに呼び集めたものだ。そして銅貨を、大概は近くの寺や神社で祝福された銅貨を取る。私の手の中のこの銅貨と同じような」

大将は一呼吸入れました。

「それで」と、ある兵士は甲高い声で言いました。「その後、どうしたのですか？」

「すると、指揮官は彼の兵士たちに告げるのだ。『兵士たちよ！ これからこの銅貨を投げる。もしこの銅貨の表側が上になって落ちたら、我々の勝ちということだ』。そして表側が上になった時はいつも——たとえどれほどの勝算であろうが、あるいは、どれほど敵が数の上で圧倒していようが——自分たちが戦いに勝つのだ」

「えっ？」「そんな、まさか？」「いつも？」 兵士たちは驚きました。

「そうだ」と、大将は言いました。「いつもだ。だから今、私は自分の手の中にある、この銅貨を投げよう。そして、私の言葉を覚えておくように。もしこの銅貨の表が上になったら、我々は勝利するだろう。我々の前に、我々の祖先がそうだったように」

大将は親指と人さし指の間に銅貨を取りました。兵士たちはよく見ようと、わずかばかり近くに寄って来ました。彼らの好奇心——彼らの希望、もしかしたら、本当にもしかしたら、自分たちの運命はあらかじめ決められてはいないと信じたい気持ち——が、どのような懐疑心にも打ち勝ちました。

指ではじいて、大将は銅貨を空に放り上げました。高く、高く、高く上がって行くと、それは木の枝の先端を越えて宙返りしました。全員の視線がそれを追いました。動くことは言うまでもなく、彼らは呼吸さえもほとんどできませんでした。

とうとう、永遠のように感じられた後、重力が銅貨を引き戻して、大将が伸ばしていた手の平の中に落ちました。下を向いてそれを見る彼の顔は無表情でした。そして顔を上げました。

「表だ」と、彼は言いました。

一瞬、皆が静まり返りました。そして、歓声が湧き上がりました。雷のような拍手喝采です。兵士たちは互いに抱き合い、胸をどんと叩き、握り拳を空に向けて突き上げました。にわかにも、どんなことでも可能になりました。勝利が見えてきました。

新しい力を手に入れ、兵士たちは戦いに向かって行進しました。彼らは敵勢の大群が彼らに向かって突進して来るのを見ても、動揺せず、阻止されることもありませんでした。彼らはあらゆる戦略を意のままに用いました。自分でさえ持っていると感じがなかつたどう猛さで戦いました。そして何と、その日が終わるまでに、敵は敗北を認めました。

大将は桜の木のそばにある彼の位置から、敵軍が引き返して行くのを眺めていました。空はまた、オレンジ色の夕日に染まっていました。太陽も、一日の仕事を終えて休みに帰るところでした。

ちょうどその時、近くで物音がしました。大将が振り返ると、兵士の一人が近づいて来るのが見えました。それは先に、御所からの知らせを届けた兵士でした。

「大将」と、兵士は言いました。「何というこの上ない運命を我々は持っているのでしょうか！ あの銅貨の表が上に出たとは！」

「そうだな、本当に」と、大将は言いました。「我々の運命は信じられないほどだ」

「さあ」と、しばらくして彼は言いました。「おまえにこれを持っていてもらいたい」。彼はその銅貨を兵士に手渡し、兵士は自分の手を杯のようにして受け取りました。

「運命を思い出させてくれるもの」と、大将は言いました。「それはおまえの手の中にあるということ」。彼は兵士の背中を軽くたたいてから去りました。

兵士はその銅貨を見下ろしました。その表が一日の最後の夕日の光を捉えました。彼はそれを裏返してみました。またしても、表が太陽の日に反射して輝きました。

